

2013年大学入試センター試験【講評(速報)】 古文・漢文

2013年の大学入試センター試験の古文・漢文は、ここ数年の傾向からみて当然予想されることではあったが、昨年度に比べて、「やや難化」などというレベルを超えて、明らかに難化している。古文は昨年度に比べて50字前後長文化しているし、知識だけでは解けず、内容がしっかり読み取れていないと解答できない設問が多くみられた。漢文は17字減少しているものの、設問数はセンター試験史上初の8問であった。文意も特に後半は読み取りにくく、苦戦した受験生の多かったと思う。

第3問(古文)は中世の擬古物語＝後期王朝物語・鎌倉時代王朝物語『松陰中納言物語』からの出題。中世・近世の作品からの出題は、ここ数年の傾向通りである。問1は基本的に語彙の問題であるが、「心もとなし」「飽く」「いみじ」の意味を辞書的に暗記するだけでは解答できず、前後の文脈の理解が不可欠である。問2は純粋な文法問題。「ぬ」「に」の識別は基本中の基本であるから、ここは必ず得点したい。問3・問4は文脈の理解。問3は直前の一文が読めていれば容易である。問4は直後の笑いの意味と、「御胸の露」の意味する内容が理解できているかどうかである。問5は昨年同様、和歌の問題。後朝の和歌の持つ意味や、当時は男が和歌を詠み、女が答えるのが原則であるという古文常識が役立つ。問6は表現と内容把握をからめた設問である。表現を問う設問は三年連続の出題であるが、内容把握とからめられている点、新傾向の出題といえる。センター試験の古文・漢文は、これからの数年間は、こうした従来あまり問われていないタイプの設問が、各1題ずつは出題されると思われるので、注意したい。総じて、語彙や文法だけの、単純な暗記で処理できる設問が減少し、正しく文脈を理解していることが求められる傾向が強くなり、その分、相当の難化と判断してよいと思う。

第4問(漢文)の出典は『張耒集』。自分の身は左遷されるが、海棠の花は昨年と同様に咲いているという、いわば人事と自然を対照的に描いている点は常套的だが、後半に行く程、文意が捉えにくくなる傾向がある。問1は漢字の用法を問う設問であるが、例年よりやや難しい。問2は心情の理解ではあるが、「沢」から「恩沢」、「悦」から「喜悦」という熟語が類推でき、かつ傍線部後半の「棠」が主語で、「茂悦」が述語という関係が捉えられれば、全体が読めなくても、何とか得点できる。こうした問題を見抜くことができれば、得点はアップしよう。問3は文脈の理解にみえて、実は句形の問題。否定詞「不」と副詞「復」の位置関係から部分否定を読み取る。問4も文脈の理解を問う設問である。作者は丁丑の年の二月六日に「謫書」を受け取り、その「周歳」、つまり年が一巡りして、「寺僧書」が到来している。問5・問7は訓読の問題であり、漢文法を正しく覚えておけば容易である。問5は「与」の用法と、「而」が何と何を接続しているのかを考える。問7には反語、否定の句形が含まれる。問6の解釈は傍線部だけ見ていないで、次の行の「其行止未能自期」あたりを読み込もう。問8は文章全体への目配りが必要不可欠である。漢文は古文に比べて、暗記・知識で得点できる設問(問2・5・7など)が多いので、それらを落とさないことが得点アップの基本である。